

## 新刊紹介

### 曹洞宗宗学研究所編 『道元思想のあゆみ』

平成五年（一九九三）七月に曹洞宗宗学研究所の編纂になる『道元思想のあゆみ』全三巻がようやく吉川弘文館より発刊されている。すなわち、具体的には、

- (1) 『道元思想のあゆみ1 〈鎌倉時代〉』
- (2) 『道元思想のあゆみ2 〈南北朝・室町時代〉』
- (3) 『道元思想のあゆみ3 〈江戸時代〉』

という三冊であり、その企画がすでに昭和六〇年（一九八五）一〇月に始まっていることから、実に発刊に漕ぎ着くまで八年近い歳月を経過している計算になる。宗学研究所長の鏡島元隆先生を中心に、同所出身の松田文雄・河村孝道・小坂機融・新井勝龍・永井政之という駒沢大学の各先生が編纂委員となり、実務を宗学研究所の元幹事であった佐々木章格氏が担当するというかたちで、多くの諸氏の賛同を得てここに完成を見るに至った大書である。

この『道元思想のあゆみ』が企画編集される背景として、かつて曹洞宗には竹内道雄先生の『曹洞宗教団史』（教育新潮社刊）などを代表に教団史に関する書物はいくつか存したものの、各時代の宗学の内容にせまる教学史についてまとめたものがほとんどなかった

佐藤秀孝

ことが挙げられる。ここでいう曹洞宗の教学史とは、日本曹洞宗七五〇年の歴史の上で、その教えが如何にそれぞれの時代の中で表宣されてきたかを問題にするものであるが、この面に関してはこれまで総合的にまとまった成果がほとんどなされていなかったのが実情であろう。

こうした点を憂慮して企画された本書は、まさに宗祖である道元禅師（以下、敬称を略する、一一〇〇—一二五三）が生きた鎌倉時代より江戸末期に至るまでの日本曹洞宗の六世紀半にわたる宗旨宣揚のあゆみを、それぞれの時代背景を考慮して教学史的にまとめあげた待望の編著といつてよい。もちろん、日本の曹洞宗は道元の系統（永平下）のみではなかったことから、若干ながら来日僧の東明慧日（一二七二—一三四〇）や東陵永瑛（一二八五—一三六五）を派祖に仰ぐ中世五山の宏智派や、同じく心越興徳（東阜、一六三九—一六九六）を派祖に仰ぐ江戸時代の寿昌派といった別系統の曹洞宗についても触れられているが、そのほとんどは道元を源流に仰ぐ永平下の日本曹洞宗の宗門教学の歴史的展開を明らかにせんとしたものである。

そもそも本書を編纂した曹洞宗宗学研究所は、両祖である道元や瑩山紹瑾（一二六四—一三二五）の思想や曹洞宗の教理という、いわゆる曹洞宗学（古くは宗乗とも）を究めるべく創立された曹洞宗門の研究機関であり、昭和二十九年（一九五四）に発足して以来、すでに四〇年もの歳月を経過している。ほかならぬ私自身もまたその退所終了者のひとりに名を連ねる身であって、在所中は宗学や禅宗史などの学問研究に勤しむとともに、永平寺の「眼蔵会」や総持寺の「伝光会」などに参加したことがなつかしく想い起こされる。

ところで宗学研究所では創立以来、多くの人材が育成され、年一回まとめられる『宗学研究』は冊を重ねて久しく、新たに発刊された『宗学研究所紀要』もすでに数号をかぞえるに至っている。また近年にはその活動も軌道に乗っており、宗学研究所編になる個別の書籍としても、

- (1) 『訓註参同契吹唱』（昭和六十一年一〇月、宗学研究所発行）
- (2) 『曹洞宗関係文献目録』（平成二年一月、曹洞宗宗務庁発行）
- (3) 『法戦式用語解説―よくわかる問答集―』（平成四年三月、宗学研究所発行）
- (4) 『真字正法眼蔵三百則語彙索引』（平成五年三月、宗学研究所発行）
- (5) 『修証義と正法眼蔵との対比』（平成五年四月、曹洞宗宗務庁発行）

などが相継いでまとめられている。単に個人による個別研究のみでなく、共同研究というかたちでもしだいに成果が実っている状況にあるといつてよい。もちろん、『曹洞宗関係文献目録』や『真字正法眼蔵三百則語彙索引』などは、多くパーソナル・コンピュータ

を駆使した最新の編集成果であり、今後、こうした分野での整理・分析や、データ・ベース化はますますその価値を増すものである。とくに『曹洞宗関係文献目録』などは、逐次に最新の著書・論文が増補されていく性質のものであるから、今後も増補・改訂版がつづくことを期待したい。

これに比して、同じ共同研究とはいっても、今回の『道元思想のあゆみ』三冊はそれぞれ道元および曹洞宗の思想と歴史を専門にしてきた研究者、とくに宗学研究所出身のOBと現役の所員を中心に、さらに今日の宗門を担う多くの研究者の賛同を得てまとめられたものであり、その面では各個人の日頃の研究課題・研究成果を集大成して完成した純粹の研究書であり、それぞれの個別の研究を活かしつつ総合的にまとめられている。

もちろん難解な研究書としての面のみが強調されているというわけではなく、宗門僧侶や一般の読者をも十分に意識に入れた配慮がなされており、かなり分かりやすくまとめられた啓蒙・教養書といった感がある。漢文の引用はできるだけ書き下しに直したり、難しい専門の用語などにはひらがなのルビを付するなど、閲覧者読にも多くの便が図られていることから、その面でも広く道元禅や曹洞宗の思想史に関心を寄せる人々にとって、貴重な文献の出現といえるのではなからうか。

ところで、本書は時代区分を大きく三つに分類しており、それぞれを一冊ごとにまとめたかたちで成り立っている。すなわち、道元が入宋帰国を経て越前（福井県）に吉祥山永平寺を開創して正伝の仏法を表榜してより、その四世の法孫に当たる瑩山紹瑾が曹洞宗としてまとめ上げるまでの、いわゆる教団始動の時代を第一冊『道元

思想のあゆみ1〈鎌倉時代〉』としてまとめている。ついで瑩山系の曹洞宗教団が能登（石川県）の諸岳山総持寺や洞谷山永光寺などを中心大きく全国展開を果たした教団躍進の時代を第二冊『道元思想のあゆみ2〈南北朝・室町時代〉』としてまとめており、最後に江戸幕府の統制下に曹洞宗教団も組み込まれ、幕藩体制維持の宗派仏教として再編された教団護持の時代を第三冊『道元思想のあゆみ3〈江戸時代〉』としてまとめているわけである。

そして、各冊はさらにそれぞれの時代の道元禅・曹洞宗の特徴を諸方面から検討していく第一部と、その時代を代表した著名な曹洞禅僧を選んでその伝記と思想、宗門史上における位置づけなどを考察していく第二部とに分けられている。

第一巻の『道元思想のあゆみ1〈鎌倉時代〉』では、道元とその門下を中心とした時代から瑩山らの頃までを扱っている。道元は入宋して天童山の長翁如浄（一一六二—一二二七）に参学し、正伝の仏法を自覚して帰国しており、禅宗や曹洞宗という宗名を否定しつつ、只管打坐の坐禅の法門を挙揚するのであり、深遠な『正法眼蔵』の世界を展開している。しかしながら、その門流の人々が必ずしもそうした道元の目指した純粹な立場を守りつづけたわけではない。そんな諸相を具えた初期曹洞宗教団が始動する時期を問題にしたのが本書である。

いま、その第一巻の第一部を表題と執筆担当者の名のみで列記するならば、

### 総説（鏡島元隆）

#### 一 道元禅の形成（佐藤秀孝）

曹洞宗宗学研究所編『道元思想のあゆみ』（佐藤）

## 二 道元禅の展開

- (1) 懷辨・義介系統（竹内道雄）
- (2) 詮慧・経豪系統（伊藤秀憲）
- (3) 寂円・義雲系統（東 隆眞）
- (4) 瑩山の宗風（光地英学）

— 密教的配慮と『伝光録』の精神 —

- 三 中国禅と道元禅（石井修道）
- 四 臨濟禅と道元禅（納富常天）
- 五 達磨宗と道元（高橋秀栄）
- 六 道元禅と民衆教化（桜井秀雄）

となり、道元禅の形成から展開までを諸方面から考察している。ここでは曹洞宗という名称をあまり使用しておらず、あくまで道元禅とその隣接する課題というかたちでまとめ上げられているのが特徴であろう。

鏡島元隆「総説」では、「道元の宗風」を宗派を否定した正伝の仏法と只管打坐の坐禅の挙揚という二面からとらえており、それが「道元門下の立場」としていくつかの流れを形成したとし、「懷辨・義介とその思想」において、道元の著述を後世に伝えることに尽力した孤雲懷奘（懷辨とも、一一九八—一二八〇）の功績と、それを継承したはずの徹通義介（一二一九—一三〇九）と義演（？—一三三四）による三代相論を取り上げている。ついで「詮慧・経豪とその思想」において、『正法眼蔵聞書』を残した詮慧と『正法眼蔵聞書抄』を残した経豪の師資による功績に触れ、天台本覚思想との関わりを指摘している。「寂円・義雲とその思想」では、来日して道元門下となった寂円（一二〇七—一二九九）と法嗣で永平寺第五代

中興となった義雲（一二五三—一三三三）を取り上げ、中国曹洞の禅風に回帰する発想と六〇巻本『正法眼蔵』の編集に触れている。そして、最後に「瑩山とその門下の宗風」として、瑩山とその門流が曹洞宗としての自覚と密教的要素によって飛躍的な全国展開を果たした活動のありようについて触れている。

また佐藤秀孝「道元禅の形成」では、はじめに道元禅形成の背景として道元の伝記を取り上げて諸般の問題点を指摘しており、その仏法の形成過程を伝記面から考察し、道元がその生涯の折々で着実に思想的な深化を遂げているとしている。そして道元の仏法として、宗名の否定を通じた正伝の仏法の挙揚、只管打坐の仏道修行、看話禅的な見性悟道の否定、真字『正法眼蔵』の問題、現成公案の重視、修証不二と不染汚の修証、在家・女性の成仏の問題、十二巻本『正法眼蔵』と出家修道のこと、本覚思想批判、清規と日々の行持のことなど諸般の問題について論じている。そして、最後に道元門下の宗風の継承として、やはり道元の教えを受け継いだ人々の流れを懐奘の立場、詮慧・経豪の立場、寂円・義雲の立場、義介・瑩山の立場、義尹の立場など、いくつかに分類して論じている。

さらに「道元禅の展開」では、竹内道雄「懐奘・義介系統」と伊藤秀憲「詮慧・経豪系統」と東隆眞「寂円・義雲系統」と光地英学「瑩山の宗風」に分けて、それぞれの宗風相承のありようを解説している。これらの論考は先の鏡島氏の総論の内容をさらに具体的に一々に論じたものといつてよい。

「懐奘・義介系統」では、はじめに「懐奘と道元禅の展開」として懐奘一代の足跡を、道元と出会う以前の参学のさまと、道元への初相見と入門、さらに道元禅への開眼と悟道・嗣法、そして孝順禅

の形成と実践、道元滅後の孝順のさまなどに分けて触れている。また「義介と道元禅の展開」として義介一代の足跡を、その出自と道元との関係、懐奘からの伝法嗣法、三代相論での義演との関係、入宋経験を踏まえた新たな道元禅の展開の面などに注目して論じている。

「詮慧・経豪系統」では、詮慧と経豪の伝記がほとんど不明である点が述べられ、ついで『御抄』の成立とその時期として、詮慧の『正法眼蔵聞書』と経豪の『正法眼蔵抄』との成立の年時を推測している。また『御抄』の注釈態度として「一法究尽・一法独立」ということばを取り上げ、天台本覚法門の影響などを挙げている。また、注釈の特徴を否定的表現、疑問詞と疑問の助詞、打返し表現などから窺っている。そして、『正法眼蔵』と『御抄』とを区別し、それぞれの思想的解明が必要な点を指摘している。

「寂円・義雲系統」では、道元を慕って来日した寂円とその唯一の法嗣である義雲の略伝を述べ、またこの両者と瑩山との関わりが語られている。そして、『義雲和尚語録』などから寂円の宗学を推測し、また義雲の宗学をおさえており、両者が中国曹洞禅とりわけ曹洞五位思想と南宋初期の宏智正覚（一〇九一—一一五七）の黙照禅に傾倒していたことや、臨済宗を包容する立場にあったことを特筆している。

「瑩山の宗風」では、曹洞宗の教団としての発展の基盤が瑩山によって形成されたことを踏まえ、『瑩山清規』や『洞谷記』などから、その宗風の特徴が密教的儀礼を大胆に取り入れ、時代社会にあった在家教化に乗り出した点にあったとしている。そして、その密教的配慮の来由を栄西や懐奘・義介、さらに瑩山が参学した法灯派

の無本覚心（法灯国師、一二〇七—一二九八）らに求めている。また瑩山の主著『伝光録』の精神が悟道の徹底と本来心の究明にあるととらえている。

石井修道「中国禅と道元禅」では、中国の禅を唐代禅・宋代禅・如浄禅の三つに分け、これを修証観と仏性思想の二面からそれぞれ道元禅と比較している。唐代禅との比較では「南岳磨磚打車」の話を道元が執坐の否定でなく作仏の否定としてとらえ、仏作仏行としての只管打坐を主張したことを挙げ、また仏性について唐代禅が本来具有を主張するのに対して、道元禅はこれを否定して無常なる自己に徹することにあるとしている。宋代禅との比較では坐禅を手段として悟りを目的とする看話禅に対して、道元禅は証上の修としての坐禅を主張したとし、また仏性を実体視して還源返本を説く宋代禅の考えを徹底的に否定したととらえている。さらに如浄禅との比較では、唐代の本覚思想を受け継ぐ默照禅や始覚門に立つ看話禅のどちらをも克服せんとした如浄禅に、道元が正法を見出したとしながらも、如浄には無字の公案を使用した妙悟の主張が存するとされている。

納富常天「臨済宗と道元禅」では、道元の伝記と思想形成における臨済禅との関わりを論じている。すなわち、「栄西とその門流」として、道元は明庵栄西（一一四一—一二一五）とは相見することはないとし、具体的には栄西の法嗣である仏樹房明全（一一八四—一二二五）を師として顕密や禅さらに律などを合わせ学んだことを述べている。また栄西と親しかった東山泉涌寺の我禅房俊仍（一一六六—一二二七）からは入宋に際して中国の事情や語学を学習したらしいことを指摘している。さらに古来より問題となってい

る道元と臨済宗松源派の蘭溪道隆（一二一三—一二七八）との書簡の往復についても種々の面から論じているが、史料的には否定的な見解に傾いている。

高橋秀栄「達磨宗と道元」では、無師独悟して摂津（大阪府）の三宝寺を中心に日本達磨宗を開いた大日房能忍の行実を追い、その禅宗志向に至る道程を論じ、阿育王山の拙庵徳光（仏照禅師、一一二一—一二〇三）からの印可付法について触れている。また新たに発見された達磨宗関係の資料やこれまであまり明確でなかった能忍の弟子たちについても詳細に整理している。ついで達磨宗から転宗して道元の信認を得た懐奘の足跡を記し、道元禅の後継者として形成されていく過程を追っている。そして、懐奘と同門であった懐鑑が門下の義介らを伴って道元門下に集団投歸した事件についても簡略に触れている。

桜井秀雄「道元禅と民衆教化」では、道元の興法利生の願いについて触れ、道元の本旨が出家仏教のみにあつたのではなく、民衆教化の作略にも注がれていたことを指摘し、また道元が出家者のありかたを説示するのも、民衆教化者としての出家人の生き方を明確にすることが目的であつたからだと指摘している。新草十二卷本『正法眼蔵』も、単に出家至上主義を唱えたものというよりも、出家・在家をこえた正道志求の道標として著わされたものであるとしている点は興味深い。このほかにも道元には道俗に対する菩薩戒の授与や布薩説戒など民衆教化を意図した活動が多かつたことが明記されている。

つぎに第一巻の第二部に取り上げられた禅僧とその執筆担当者の名を挙げるなら、

- 一 道元（杉尾玄有）
- 二 瑩山（松田文雄）
- 三 明全（中世古祥道）
- 四 懷鑑（嗣永芳照）
- 五 懷奘（鏡島元隆）
- 六 寂円（佐藤秀孝）
- 七 詮慧と経豪（石島尚雄）
- 八 義尹（粟谷良道）
- 九 義介（鈴木格禅）
- 一〇 義演（横山和弘）
- 一一 義雲（石川力山）
- 一二 明峰（務台孝尚）
- 一三 曇希（石川力山）
- 一四 峨山（今枝愛真）
- 一五 大智（水野弥穂子）

という一六人が挙げられており、これらの人々はともに初期の永平寺僧団ないし曹洞宗教団を担った禅僧たちにはかならない。偉大な先覚者道元を中心として永平寺に集った人々が、その後、道元の示寂を契機としていくつかの系統に離散分裂し、それぞれに独自の立場を貫いて新たな展開を図った足跡を、各個人の伝記の中に窺ったものである。

杉尾玄有「道元」では、生から死に移るのではなく、生死こそが仏の御いのちであり、前後際断・刹那生滅するありようこそ真実であるとする「生死」の巻を中心として、道元の『正法眼蔵』の世界を参究しており、道元の生涯を窺って、その道元禅成立の過程をと

くに在宋中における天童如浄との面授と、それ以前の諸山歴遊中における開眼の事実に求めている。そして、道元はこの仏の御いのちを人々に実践させんがために出家専念の安き道を説いたのだと解している。

松田文雄「瑩山」では、これまでの五八歳説ではなく、新たな六二歳説に基づいて太祖瑩山紹瑾の行実を全般的に整理しなおしており、その参学の過程から「平常心是道」の悟りの機縁、加賀（石川県）大乘寺住持としての『伝光録』の開演、能登の永光寺の開創と伝灯院五老峰の建立、そして総持寺の開創などを考察している。また法嗣・門人や、開創寺院・著述などについても簡略に整理分類している。

中世古祥道「明全」では、榮西の高弟で道元が師と仰いだ仏樹房明全（一一八四―一二二五）について、榮西門下としての立場を踏まえつつ、その入宋から天童山景德寺での示寂までを記し、真摯な仏法者として生きた明全のすがたを描いている。

嗣永芳照「懷鑑」では、越前の波著寺に在った日本達磨宗正伝の覚禅懷鑑（？―一二五一）が門下を引き連れて深草興聖寺の道元の席下に投じた消息を述べ、永平寺の道元門下での懷鑑の立場とその波著寺への帰山、さらに示寂に際しての義介への達磨宗附法などを考察している。

鏡島元隆「懷奘」では、道元の高弟として永平寺第二代を継いだ孤雲懷奘（一一九八―一二八〇）の生涯を述べた後、その業績として、大法の相続と人材の育成、『正法眼蔵』の結集と『永平広録』の編集、永平寺伽藍の完成と規矩の整備を挙げている。また『正法眼蔵随聞記』などを残した点を評価しながらも、その著『光明蔵三

味』については懐奘親撰を疑問視している。

佐藤秀孝「寂円」では、天童如浄の席下で同参であった道元を慕って来日した中国僧寂円（一二〇七—一二九九）の生涯を追い、如浄の塔所承陽庵を守った消息、懐奘からの印可、越前宝慶寺の開創など一塔主職を貫いた孤高のありようを語り、その徹底した只管打坐の実践や隠棲韜晦の精神など厳しい禅風について触れている。

石島尚雄「詮慧と経豪」では、道元に嗣法して『正法眼蔵聞書』を残した詮慧と、その弟子で『正法眼蔵聞書抄』を残した経豪について、限られた資料から足跡を追っている。とくに詮慧が京都永興寺のみでなく、関東常陸（茨城県）に陽雲寺を開いている事実や、経豪が道元の茶毘の席に随侍していた点などに注目している。

粟谷良道「義尹」では、肥後（熊本県）大慈寺の開山で法皇長老と称せられた寒巖義尹（一二一七—一三〇〇）について、その皇胤説を考察した後、日本達磨宗徒か否かも問題としており、道元門下での消息から二度の入宋について触れ、さらに古来、問題とされている嗣承の問題などを論じている。

鈴木格禅「義介」では、日本達磨宗から道元門下に投じた徹通義介（一二一九—一三〇九）の足跡を述べており、老婆心の欠如から道元より嗣法を許されなかったあたりよう、懐奘からの付法と入宋視察などに触れ、とくに永平寺での三代相論を経て加賀大乘寺を開創する問題など、後半生の不遇な面にも及んでいる。

横山和弘「義演」では、永平寺第四代の義演（？—一三二四）について限られた資料の中から推測しており、日本達磨宗徒から道元に投じたこと、懐奘会下での立場から義介との間の三代相論に及び、その開創したとされる報恩院のことや、頂相・遺墨についても

触れている。

石川力山「義雲」では、永平寺第五世中興の義雲（一二五三—一三三三）について、その出自をめぐる檀越伊自良氏との関わりや、出家修学での達磨宗との関係を仮説し、さらに寂円からの嗣法と宝慶寺への晋住、六〇巻本『正法眼蔵』の編集、永平寺への入寺とその復興などを論じている。

務台孝尚「明峰」では、瑩山門下筆頭の法嗣で、いわゆる明峰派の源流をなした明峰素哲（一二七七一—一三五〇）について、現存するわずかの資料に基づいてその行実を追い、大乘寺・永光寺を継承した足跡と、開創した越中（富山県）光禅寺での活動を述べ、二編の「仮名法語」や弟子たちの教線拡張についても触れている。

石川力山「曇希」では、寂円派の義雲の法嗣で宝慶寺から永平寺に晋住した曇希（一二八八—一三六五頃）が、災上した永平寺伽藍の復興をなし、また檀越の伊自良知冬の援助を得て『義雲和尚語録』『学道用心集』『永平元禅師語録』の開版事業を行なった事跡を特筆している。

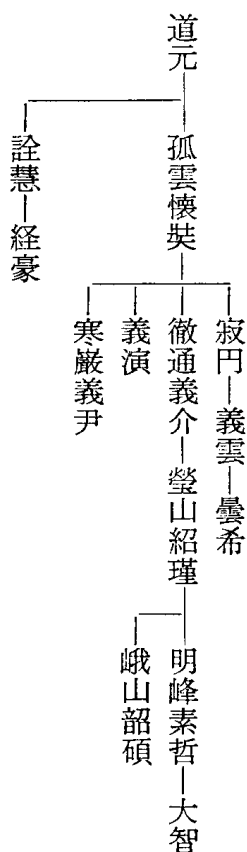
今枝愛真「峨山」では、瑩山門下として総持寺第二世を継いで曹洞宗教団の全国発展に大きく貢献した峨山韶碩（一二七六一—一三六六）の行実を述べ、その門弟育成のすぐれた才腕が語られている。また法灯派の孤峰覚明（一二七一—一三六一）との間でなされた南朝からの瑩山に対する「仏慈禅師号」の下賜をめぐる問題なども興味深い。

水野弥穂子「大智」では、今日でも曹洞宗門で親しまれている『大智禅師偈頌』を著して詩僧としても名高い明峰下の大智（一二八九—一三六六）の行実を追い、入元帰国から瑩山や明峰素哲との

関わりや、肥後への在住と南朝方の菊池氏の帰依、さらに山居修道の気風などについて触れている。

いま、この一六人を系譜によって示すならば、

(大日房能忍) — (仏地覚晏) — 覚禅懐鑑 — (義介)  
 (明庵栄西) — 仏樹房明全 — (道元)



ということになり、まさに道元に始まる曹洞宗教団始動の原動力となった禅僧たちの足跡が一同に会されたことが改めて窺われる。ただ、如浄や寂円・瑩山紹瑾・峨山韶碩・大智などその生没年に異説のある人の記事が執筆担当者により不統一であって、通読するとかなり疑点の箇所も見られる。しかしながら、こうした面も共同執筆ならではの特徴といえるであろう。

つぎの第二巻の『道元思想のあゆみ2 〈南北朝・室町時代〉』は、南北朝時代から室町時代・戦国時代までをまとめたものであり、いわば能登の総持寺を中心として曹洞宗教団が全国各地の津々浦々にまで展開した中世後期を取り扱っている。この時期の曹洞宗に関しては、これまで宗学史上の暗黒時代といわれ、道元の主書『正法眼蔵』なども室中に秘蔵されてわずかに謄写がなされた事実が存するのみで、思想的にはあまり注目されなかつた感が見られたのである。

しかしながら、当時の曹洞禅僧たちこそ実はもっともバイタリテ

ィーに富んだ活動家たちの宗団であったわけであり、雑多な諸信仰を巧みに取り入れつつ、江湖会・授戒会や葬送儀礼を行ない、抄物・仮名法語や門参・切紙さらに五位思想などを駆使して門人育成や民衆教化を図り、多くの寺院を建立して輪住制度などによって教団運営を開拓し、組織的に教線を拡張していくなど、諸方面で看過しがたい歴史を持っている。

すなわち、第二巻の第一部を表題と執筆担当者のみ列記するならば、

総説（鏡島元隆）

- 一 曹洞宗教団の形成と展開（松田文雄）
- 二 『正法眼蔵』編纂の歴史（角田泰隆）
- 三 五位思想の展開（新井勝龍）
- 四 清規の変遷（小坂機融）
- 五 仮名法語の展開（椎名宏雄）
- 六 曹洞宗宏智派の成立とその展開（永井政之）
- 七 曹洞宗と臨済宗との交渉（中尾良信）
- 八 曹洞宗の発展と民衆化（広瀬良弘）
- 九 曹洞宗における抄物の成立と展開（石川力山）

となっており、この巻ではすでに「道元禅」ではなく、あくまで「曹洞宗」という表現が多く用いられている。総持寺系の瑩山派下が地方に在って林下宗団として曹洞宗の立場を鮮明にしつつ、門弟の育成と民衆の教化に邁進し、教団の発展を図ったあたりが諸方面から検討されている。

鏡島元隆「総説」では、南北朝・室町期の曹洞宗が「曹洞土民」の立場から各地に積極的に教線を拡張した教団の発展について触



れ、その立場が道元の正伝の仏法・只管打坐の宗風ではなく、瑩山の密教禪の流れにあることを指摘している。そして、具体的には現世利益や加持祈禱を重視し、その一方で葬送儀礼(葬式)を行なったこと、さらに江湖会や授戒会を盛んに興行したことなどが述べられている。また、この時期の曹洞宗の思想面の展開としては、曹洞五位説の伝承や、『正法眼蔵』の謄写・編集のありよう、禪戒論の発生、さらに公案の流行と門参・抄物の発生などが挙げられている。

松田文雄「曹洞宗教団の形成と展開」では、はじめに道元が示寂して後の曹洞宗教団の形成について触れており、その展開では、大きく寂円派の永平寺・宝慶寺僧団と寒巖派の大慈寺・普濟寺僧団と明峰派の大乗寺・永光寺僧団と峨山派の総持寺僧団という四つに分類し、それぞれの流れについて簡略に触れている。とくに総持寺僧団については、総持寺山内の五院による維持体制の確立とそれを担った峨山下五哲の門流を概観し、さらに他の峨山下の諸系統の活動にも及んでいる。また曹洞宗教団発展の事由についても、寺院開創の事情などから種々に分析している。

角田泰隆「『正法眼蔵』編纂の歴史」では、はじめに中世に筆写された七五巻本と六〇巻本と一二巻本と二八巻本という四種の『正法眼蔵』の古写本について述べ、種々の問題点を挙げて諸本が成立してきた事情を考察整理している。そして、さらに江戸期における『正法眼蔵』の編纂として、七五巻本に基づく八三(および八四)巻本、六〇巻本に基づく八三巻本、卍山編集の八九巻本、および今日一般にいわれる九五巻本について述べている。今日、一二巻本『正法眼蔵』の編纂意図など、『正法眼蔵』に対する関心がきわめて問題視されている時期であるだけに、興味深い論考であろう。

新井勝龍「五位思想の展開」では、はじめに中国における曹洞五位思想について触れ、ついで道元が必ずしも全面的に五位思想を否定したわけではないことを論じている。さらに義雲・峨山韶碩・大智・仁叟浄熙(?!一三六四)の四人における五位説依用の実例を挙げ、またその後の峨山門下における五位説の展開を実峰派・無端派・通幻派・太源派に分けて考察しており、とくに太源派の傑堂能勝(一三五五—一四二七)と南英謙宗(一三八七—一四五九)の師資による功績を高く評価し、謙宗の『頭訣耕雲註種月拈撫藁』を用いて易学との関連から五位の宗旨を探っている。

小坂機融「清規の変遷」では、はじめに中国における清規成立の意義を述べ、ついで現存最古の北宋代の『禪苑清規』と、これを受けて宗門の基準となった道元の『永平清規』について触れている。さらに室町時代以降の宗門の清規に指導的な役割を果たした瑩山の『能州洞谷山永光禪寺行事故』(『洞谷清規』『瑩山清規』とも)の特質を述べ、修行道場における実質的規範として機能したことが強調されている。また瑩山の清規を伝承した『正法清規』と『竜泰寺行事故次序』その他を取り上げており、最近発見された通幻下の普濟善教(一三四七—一四〇八)筆写の越前禅林寺本などにも触れている。さらに寒巖派の清規として『普濟寺日用清規』も取り上げられている。

椎名宏雄「仮名法語の展開」では、中世の禅宗において仮名法語が述作された過程を論じ、その内容を分析している。取り上げられているものは、懷奘の「光明蔵三昧」と、瑩山の「洞谷開山法語」「洞谷開山瑩山和尚之法語」「能州洞谷開山法語」と、明峰素哲の「明峰和尚法語」「智首座に与ふる法語」と、峨山韶碩の「峨山和

尚法語五編」「甘露白法語」「峨山和尚談義見聞」と、館開僧生の「洞谷僧生和尚法語」と、大智の「覚阿上人に与ふる法語」「十二時法語」「本文大事法語」および道元に仮託された「永平開山道元大和尚仮名法語」である。そして、これらの特色を形式面と思想面から窺っており、中世の曹洞宗が道元禅のみでは割りきれない諸相を持っていたことが指摘されている。

永井政之「曹洞宗宏智派の成立とその展開」では、道元の系統とは別に鎌倉末期に來日した東明慧日（一二七二—一三四〇）や、南北朝時代に來日した東陵永興（一二八五—一三六五）により日本に伝えられた宏智派の曹洞宗について、その展開・盛衰を追ったものである。はじめに慧日が建長寺や円覚寺など鎌倉禅林でなした活動を述べ、その高弟である別源円旨（一二九四—一三六四）と不聞契聞（一三〇一—一三六八）の足跡に及んでいる。また鎌倉円覚寺開山の無学祖元（一二二六—一二六八）の俗姪子に当たる永興が來日した経緯や京都禅林でなした消息について触れている。そして、その後も宏智派の禅僧が臨済宗の五山派に互して活動し、五山文学にも貢献したことが述べられている。

中尾良信「曹洞宗と臨済宗との交渉」では、はじめに道元と栄西・明全との師資関係に注目し、さらに退耕行勇（一一六三—一二四一）らとの関わりにも触れている。義雲と臨済宗との関わりでは大応派の月堂宗規（一二八五—一三六一）と大慧派（もとは宏智派）の中巖円月（一三〇〇—一三七五）の來參に視点を当てている。さらに瑩山が法灯派の無本覚心（法灯国師）に參じたことを契機に、その法嗣の恭翁運良（一二六七—一三四一）と孤峰覚明（一二七一—一三六一）が逆に瑩山に參じていることを述べ、そのため

その後の曹洞禅僧たちも法灯派の人々と積極的に交流している事実に触れている。

広瀬良弘「曹洞宗の発展と民衆化」では、はじめに曹洞宗発展の時期と地域を分析整理し、寺院建立などそのピークが南北朝が合一した直後と戦国時代から江戸初期に至る時期にある点や、とくに東海から東日本に発展を遂げた点などを指摘している。また曹洞禅僧の活動を葬祭と授戒会の二面からとらえ、曹洞宗の民衆化を論じており、当時の禅僧の語録などの分析から、はじめは坐禅などの宗義面が主であったものがしだいに葬祭関係を中心とする方向へ内容が移行していることを挙げている。そして、具体的に三河（愛知県）乾坤院の『血脉衆』や近江（滋賀県）徳勝寺の『当寺前住数代之戒帳』などを通して、中世における禅僧の授戒会の実態を詳細に分類考察している。

石川力山「曹洞宗における抄物の成立と展開」では、室町中期から江戸初期に至る間に成立した曹洞宗の抄物（洞門抄物）の資料、すなわち仮名書きの講義の聴聞記や室内伝法の相伝書について論じている。そして、洞門抄物を語録抄（聞書抄）と代語（代・下語・著語）と門參（本參・秘參・伝參・參・秘書）と切紙（断紙）に大きく分類し、それぞれの機能や形態さらに特徴などを問題にしている。こうした各地に残る当時の具体的な講義や室内伝法の資料を考察整理していくことから、中世禅宗史の研究がより鮮明になる点を指摘している。

つぎに第二部に取り上げられる禅僧とその執筆担当者の名を示すならば、

一 太原（高橋全隆）

- 二 通幻（山端昭道）
- 三 無著（石井清純）
- 四 月泉（渡部正英）
- 五 源翁（葉貫磨哉）
- 六 大徹（原田弘道）
- 七 了庵（三沢智証）
- 八 梅山（竹内弘道）
- 九 石屋（小林準道）
- 一〇 太容（大友泰司）
- 一一 傑堂（佐藤秀孝）
- 一二 如仲（中嶋仁道）
- 一三 南英（竹内道雄）
- 一四 月江（山本世紀）
- 一五 川僧（古田紹欽）
- 一六 大空（金田 弘）

という一六人が挙げられている。いずれも、全国各地に在って曹洞宗の地方発展に貢献した優れた禅僧たちであり、それぞれの門流によって今日に見るとき一五〇〇〇ヶ寺にも及ぶ大教団への基礎が築かれたわけであり、その面でもこの時代を代表する曹洞禅僧たちの足跡が一同にまとめられた意義は大きい。

高橋全隆「太源」では、峨山下五哲の一として総持寺第三世となつた太源派祖の太源宗真（？—一三七一）の略伝を述べた後、日本人の宗教観を論じ、総持寺で祀られる伽藍守護の三宝大荒神と宗真の関わりや、宗真の宗学上の位置などを論じている。

山端昭道「通幻」では、五哲の一として通幻派祖となつた通幻寂

霊（一三二二—一三九一）の稀有な活動を述べ、総持寺普住と妙高庵の存在、加賀聖興寺・丹波（兵庫県）永沢寺・越前竜泉寺などの開創や、文字点検・活埋に見る厳しい学人接化の家風、さらに五院の輪番制による寺院運営など総持寺発展の礎を築いた功績などを論じている。

石井清純「無著」では、峨山下の無外円昭（一三一—一三八一）の法嗣である無著妙融（一三三三—一三九三）が豊後（大分県）など九州北部でなした活動に視点を当てており、とくに宇佐神宮など諸神祇との接触などが指摘されている。その開いた豊後の泉福寺に所蔵される『正法眼蔵聞書抄』に関する考察も興味深い。

渡部正英「月泉」では、陸奥（岩手県）黒石の正法寺や出羽（秋田県）の補陀寺などを中心に奥羽（東北地方）一円に教線を拡張した月泉良印（一三一—一四〇〇）とその門下の人々の活動を追いつ、とくに熊野修験や山岳信仰など諸信仰から受けた影響などを挙げています。

葉貫磨哉「源翁」では、那須（栃木県）の殺生石（九尾狐）を濟度したことと有名な源翁心昭（一三二九—一四〇〇）の足跡を述べ、総持寺教団から離れて神通力と密教的行法によって東北から山陰に至る諸地を歴遊し、庶民救済と曹洞宗の民衆化に貢献したさまを伝えている。

原田弘道「大徹」では、五哲の一で大徹派祖となつた大徹宗令（一三三三—一四〇八または一三三〇—一四〇五）が総持寺発展に貢献し、越中（富山県）立川寺などを開いた足跡を略述し、門下の竺山得仙（一三四四—一四一三）の『護国竺山和尚語録』を峨山韶碩の『山雲海月』と比較考察し、韶碩・宗令・得仙の三代が偏正五

位など曹洞宗旨を宣揚した点を指摘している。

三沢智証「了庵」では、相模（神奈川県）の大雄山最乗寺を開創した通幻下の了庵慧明（一三三七—一四一一）の行実を述べ、これを外護した妙覚道了（道了薩埵）の存在から修験との関わりを指摘する。また慧春尼ら了庵門下の人々を取り上げ、了庵派大発展のありようを考察している。

竹内弘道「梅山」では、太源下の梅山聞本（？—一四一七）の行実を追って総持寺への晋住から越前竜沢寺の開創、足利氏の帰依などを論じ、『竜沢寺文書』などを活用してその制定した禁語・制誡・法度や輪住制について触れ、さらに中世曹洞宗の戒法を知る上でも貴重な『梅山和尚戒法論』の内容に及んでいる。

小林準道「石屋」では、薩摩（鹿児島県）福昌寺を開いた通幻下の石屋真梁（一三四五—一四二三）が島津氏の出身で法灯派や五山の禅僧にも学んだことを述べ、その門流が南九州や周防（山口県）などに大きな勢力を有したことを伝える。

大友泰司「太容」では、太源下の了堂真覚（一三三〇—一三三九）の法嗣で丹波（京都府）玉雲寺を開いた太容梵清（？—一四二七）の足跡を述べ、梵清本『正法眼蔵』の書写や流布本『瑩山清規』の編集に尽力した点を挙げている。また『太容和尚語録』に触れた後、真覚に学んだ世阿弥（一三六三—一四四三）の能楽論と曹洞宗との関わりなどにも及んでいる。

佐藤秀孝「傑堂」では、南朝の重鎮である楠木正成（？—一三三六）の俗孫として出家し、太源下の梅山聞本の法を嗣いだ越後（新潟県）耕雲寺の傑堂能勝（一三五五—一四二七）の行実を追い、越後から東北南部や北関東に及ぶ活動や、山居韜晦の気風と五位思想

の研鑽などを通した学人接化の消息を伝えている。

中嶋仁道「如仲」では、同じく聞本の法を嗣いで遠江（静岡県）大洞院などを開いた如仲天闍（一三六三—一四三七）の行実を述べた後、今日に残る「遺命」「自贊」「鐘銘」「禅堂規矩」および『如仲闍老禅師法語』などからその禅風を窺っている。

竹内道雄「南英」では、太源派の傑堂能勝の法嗣で中世の曹洞五位の権威として名高い南英謙宗（一三八七—一四五九）について、その著作を列記した後、行実を追って入明帰国や越後種月寺などでの活動を伝えており、現今に伝わる数多くの著作からその学識の深さが特筆されている。

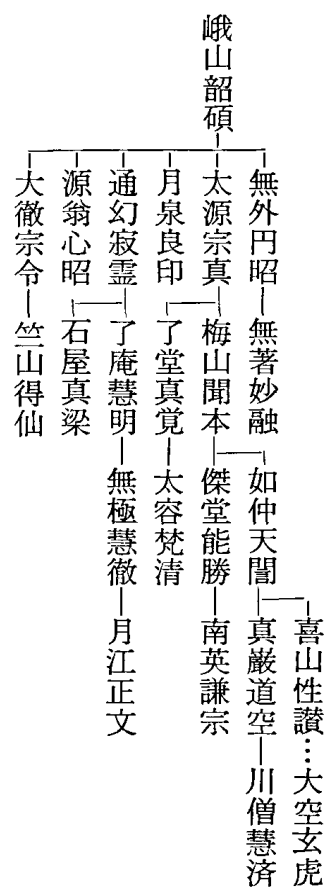
山本世紀「月江」では、通幻派了庵下の無極慧徹（一三五〇—一四三〇）の法を嗣いだ月江正文（？—一四六二）の足跡を追い、その関係寺院や法嗣について触れ、曹洞宗史上に果たした役割、とりわけ大中寺・総寧寺など近世の僧録寺院へと連なる位置づけを指摘している。

古田紹欽「川僧」では、太源派の如仲天闍の法孫で、祖録の提唱にすぐれて『人天眼目抄』などの抄物を残した川僧慧济（？—一四七五）が遠江の一雲斎などでなした活動を追い、『川僧禅師語録』などから同時代の臨済宗の一休宗純（一三九四—一四八八）にも通ずる破格の禅風について触れている。

金田弘「大空」では、やはり太源派の如仲系に連なる戦国期の大空玄虎（一四二八—一五〇五）の足跡を追っている。玄虎は北畠氏の帰依を受けて伊勢（三重県）の浄眼寺開山となっており、『碧巖大空抄』などの抄物を残して名高いことを伝えている。

このように南北朝時代から戦国時代に及ぶ主要な曹洞禅僧につい

て、その伝記と禅風や曹洞宗史上の位置づけなどを論じている。いま、これをやはり糸図によって示すならば、



となり、当時の主流であった峨山派下の人々のみが対象となっており、他の寂円派・寒巖派・明峰派などからは一人も挙げられていないことが知られる。しかも峨山韶碩の法嗣が実に五人も取り上げられ、その後の人も多くは太源派と通幻派の禅僧に限られていることが判明する。また大空玄虎を除いてすべて室町中期より以前の人であることも知られ、とりわけ戦国時代後期から安土桃山時代に至る曹洞禅僧は、史料の不足もあってか全く取り扱われていないことになる。これはもちろん大門派を形成した人や重要な著述を残した人を対象としたためであるから、致し方ない面もあるが、欲をいえば戦国後期の禅僧の中からも若干の伝記を選んでほしかったという気がしてならない。

さらに第三巻の『道元思想のあゆみ3 へ江戸時代』では、徳川幕府の成立によって曹洞宗が幕藩体制下で関三利や兩大本山を頂点とする統制を図り、新たな宗門の秩序が形成された時代をまとめたものである。その一方で『正法眼蔵』など道元の宗旨への研鑽が進み、宗統復古が叫ばれて江戸宗学が開花するなど、曹洞宗教団にと

って教団護持に専心した時期にも相当している。

同じく第三巻の第一部を表題と執筆担当者の名のみ列記するならば、

#### 総説（鏡島元隆）

- 一 近世における道元禅の展開
- (1) 嗣法論の展開（黒丸寛之）
- (2) 禅戒論の展開（渡部賢宗）
- (3) 清規論の展開（小坂機融）
- (4) 五位思想の展開（新井勝龍）

二 曹洞宗寿昌派の伝来とその盛衰（永井政之）

三 曹洞宗と臨済宗・黄檗宗との交渉（吉田道興）

四 曹洞宗と儒教との交渉（大谷哲夫）

五 曹洞宗と神道との交渉（圭室文雄）

—『新編相模国風土記稿』を中心として—

六 曹洞宗教団組織の確立と幕府の宗教統制（広瀬良弘）

七 曹洞宗の民衆化（熊本英人）

となっており、嗣法論では一師印証・面授嗣法の宗統復古が起こり、規矩面でも古規復古が叫ばれた点がとくに強調されている。また儒教や神道など他の諸思想との交渉など、江戸宗学と諸分野との関わりや、江戸期の曹洞宗教団の抱えた教団運営の腐心など、多くの課題をテーマに選んで諸論が展開している。

鏡島元隆「総説」では、江戸時代における宗学勃興の歴史的背景として、宗団意識の確立、幕府による学問奨励策、隠元隆琦（一五九二—一六七三）による黄檗宗の興起を挙げており、さらに江戸宗学の特徴をいくつかに分類している。宗統復古運動と嗣法論では、

嗣承観を道元の古風に帰そうとした卍山道白（一六三六—一七一五）の一師印証・面授嗣法の立場と、これに反論する天桂伝尊（一六四八—一七三五）らの立場を挙げてみる。古規復古運動と清規論では、黄檗宗の清規の影響を廃して道元の古規に復古せんとした面山瑞方（一六八三—一七六九）や玄透即中（一七二九—一八〇七）の活動を伝えている。また授戒運動と禅戒論では、黄檗禅の影響で授戒会が再興され、比丘戒と円頓戒をめぐって禅戒の定義が論争化されたとする。さらに五位における復古思想では、機関禅的な性格を廃して洞曹五位の原点に帰らんとしたとする。このほか宗門圏外の禅者としても、江戸初期の鈴木正三（一五七九—一六五五）と桃水雲溪（一六一二—一六八三）に江戸末期の大愚良寛（一七五八—一八三一）を加えて論じている。

「近世における道元禅の展開」では、江戸時代における曹洞宗学の展開を嗣法論・禅戒論・清規論・五位思想の四つの面から考察している。

黒丸寛之「嗣法論の展開」では、卍山道白と梅峰竺信（一六三三—一七〇七）らによる宗統復古運動によって、一師印証・面授嗣法が確定しているが、これに対して反論を展開し、悟証をもって嗣法の第一とした独庵玄光（一六三〇—一六九八）や天桂伝尊の立場、伽藍嗣法を認めんとした定山良光（？—一七三六）の立場を挙げてみる。そして、面山瑞方が宗門の伝法を三物相承にあるとし、北宋代の大陽警玄（九四三—一〇二七）・投子義青（一〇三二—一〇八三）の代付をも面授と断定しているが、天桂系ではこれをあくまで代付と解していたとする。

渡部賢宗「禅戒論の展開」では、月舟宗胡（一六一八—一六九

六）・卍山道白らによって禅戒論が始まり、黄檗宗の影響に対する是非をめぐって論議が展開したとし、大小乗戒兼授を主張する石雲融仙（一六七七—？）に対して、卍山系など多くは単授菩薩戒を主張しているとする。また面山が沙弥戒の必授を説いたのに対して、逆水洞流（一六八四—一七六六）はこれを不必要としたとする。

小坂機融「清規論の展開」では、江戸初期に法度によって曹洞宗門も強制的に集権化されて教団として統合されたとし、清規復興の基調もなされたとする。『永平清規』『瑩山清規』の刊行を経て、黄檗宗の影響を受けた『栴樹林清規』の成立があり、これに対して祖規復古の思想が形成されて、面山の『僧堂清規行法抄』や玄透の『永平小清規』がまとめられたとする。

新井勝龍「五位思想の展開」では、江戸初期には五位について洞済の宗旨が混乱していたが、明末曹洞宗の大家であった永覚元賢（一五七八—一六五七）が編した『洞上古轍』が伝えられて宗旨意識が高まったとされ、その影響を受けつつ、黙隠祖价や連山交易（一六三五—一六九四）さらに卍山道白らが功勳的な五位説を展開したとする。しかし、その後は天桂伝尊・指月慧印（一六八九—一七六四）・瞎道本光（一七一〇—一七七三）・洞水月湛（一七二八—一八〇三）と、しだいに道元禅による伝統的五位説が復古したとしている。

永井政之「曹洞宗寿昌派の伝来とその盛衰」では、はじめに中国明末の曹洞宗の流れについて概観し、その法門を日本に伝えた東皐心越興偉（一六三九—一六九五）について足跡を追っている。とくに水戸黄門こと徳川光圀（一六二八—一七〇〇）との関わりによる水戸の寿昌山祇園寺の開創を述べ、日本の曹洞禅僧との交流にも触

れている。一方、心越が七絃琴や墨蹟・絵画・篆刻など諸芸に長じた文化人としての面を持ち合わせていた点も強調されている。さらに『寿昌正灯録』などを通して寿昌派の門流について系譜を挙げて論じ、またこの派の人々の動向を年表によってまとめているのは貴重な成果といえる。

吉田道興「曹洞宗と臨済宗・黄檗宗との交渉」では、はじめに鈴木正三・万安英種（一五九一—一六五四）らとは江戸初期の京都妙心寺の臨済禅僧との交流について述べ、さらに臨済宗と関わった曹洞禅僧の消息を列記している。また盤珪永琢（一六二二—一六九三）や無著道忠（一六五三—一七四四）さらに白隠慧鶴（一六八五—一七六八）ら著名な臨済禅僧と曹洞宗との関わりも指摘されている。ついで建仁寺派・建長寺派・円覚寺派・東福寺派・南禅寺派・大徳寺派・相国寺派・天竜寺派などの諸師と曹洞禅僧との道交について触れており、さらに黄檗宗の諸師との道交では、黄檗宗の伝来によって曹洞宗も種々の刺激を受けたとし、容檗派と反檗派の動向を踏まえて交流のあとかたを論じている。

大谷哲夫「曹洞宗と儒教との交渉」では、近世の儒教を概観してその排仏論に対して、儒仏の区別を明確にした独庵玄光、因果を説かない儒教の天命説を批判した玄楼奥竜（一七二〇—一八一三）さらに戒の問題から儒教を非難した甘雨為霖（一七八六—一八七二）らの抗儒論を挙げ、林羅山（一五八三—一六五七）や荻生徂徠（一六六六—一七二八）ら特定の儒者を非難した人として面山瑞方・乙堂換丑（？—一七六〇）・無隠道費（一六八八—一七五七）らを挙げている。反対に儒仏合論的な禅僧としては鈴木正三・卍山道白・天桂伝尊らがあったとしている。とくに道元の真意が三教一致批判

にあった点を継承しつつ、神仏習合的に儒教に抗する姿勢が江戸時代の曹洞禅僧に見られる点を語っている。しかし、その反面、当時の禅僧が儒教を高度な教養としていたことを述べている。

圭室文雄「曹洞宗と神道との交渉―『新編相模国風土記稿』を中心として―」では、はじめに『新編相模国風土記稿』によって相模（神奈川県）における仏教諸宗派の分布の状況を概観している。つぎに曹洞宗寺院の境内神について分析整理し、白山信仰・稻荷信仰・天神信仰・秋葉信仰・金毘羅信仰など種々の神仏習合の実態を窺っている。また曹洞宗寺院が別当寺として村鎮守を兼ねて神宮的役割を果たしていた状況についても、別当寺の開創年代・本尊・鎮守の末社などの分類をもとに論じている。そして、そこに民衆の要請に適應していく近世曹洞宗の持つ強かさをとらえている。

広瀬良弘「曹洞宗教団組織の確立と幕府の宗教統制」では、慶長一七年（一六一二）に徳川幕府により発布された「曹洞宗法度」の成立によって禅僧の身分・僧階も固定化されていったとし、さらに「永平寺法度」と「総持寺法度」によって両本山制が確立したとしている。また総寧寺・竜穩寺・大中寺の関三利および可睡齋による大僧録が成立してそれぞれの支配国が決定し、その下において各地の宗政を担当する全国録所が設置されたことによって、曹洞宗教団も幕府の統制下に入ったことを記し、本末帳が作成されて本山・中本寺・末寺という本末制度が成立したことを指摘している。

熊本英人「曹洞宗の民衆化」では、簡略に江戸幕府の宗教統制が曹洞宗に及ぼした影響や檀家制度の確立などに触れた後、曹洞宗寺院と白山妙理大権現などの民間信仰、現世利益の祈禱として豊川妙厳寺の稻荷信仰、南足柄最乗寺の道了信仰、鶴岡善宝寺の竜王信仰

などを挙げており、とくに道了天狗に注目している。そして、民衆化そのものを教団の社会的権能の対処としてとらえている。

また第二部に取り挙げられる禅僧とその担当執筆者の名を示すならば、

- 一 万安（安藤嘉則）
- 二 正三（椎名宏雄）
- 三 桃水（皆川広義）
- 四 月舟（成河峰雄）
- 五 独庵（中尾良信）
- 六 卍山（鏡島元隆）
- 七 天桂（志部憲一）
- 八 指月（佐々木章格）
- 九 面山（鈴木格禅）
- 一〇 瞎道（伊藤秀憲）
- 一一 万仞（角田泰隆）
- 一二 老卵（守屋 茂）
- 一三 玄透（関口道潤）
- 一四 玄楼（吉岡博道）
- 一五 良寛（吉川彰準）
- 一六 風外（川口高風）
- 一七 物外（熊谷忠興）

という一七人を取り上げており、いずれも江戸時代を代表する曹洞宗の巨匠たちといってよい。その中にはあるいは宗門の体制の中にあつて江戸宗学の維持発展に貢献した人もあり、また、そうした体制内に互することなく闊達に漂泊自由の生涯を送った人もある。そ

の点では存外に人物的にユニークな禅僧の多かったのが江戸時代の曹洞宗教団であつたといえよう。

安藤嘉則「万安」では、宇治の興聖寺を再興した万安英種（一五九一—一六五四）の行実を追い、祖録の抄物を多く残すなど江戸初期の曹洞宗門に果たした影響を述べ、慶安年間（一六四八—一六五一）の代語講録事件（雑学事件）に対して腐心したさまや、その洞済一致的な宗風について論じている。

椎名宏雄「正三」では、三河出身の徳川幕臣から出家した鈴木正三（一五七九—一六五五）が修道者として超宗派的に利他の実践に尽したがたを追い、鋭い批判精神を持って『驢鞍橋』『破吉利支丹』『万民徳用』など多くの仮名草子を著し、分かりやすく禅の教えを説くことに努め、広く僧俗に影響を与えた点を強調している。

皆川広義「桃水」では、当時の曹洞宗門の枠にとられずに出寺の仏法を理想とした桃水雲溪（一六一二—一六八三）の生涯を追い、民衆の中に入って極貧の生活に徹し、真の救済とは何かを問いつづけた「乞食桃水」の稀有なる利他行の勝躑を窺っている。

成河峰雄「月舟」では、加賀（石川県）の大乗寺に在って古規復古に尽力し、曹洞宗の中興と称えられた月舟宗胡（一六一八—一六九六）の行実を記し、道元・瑩山の宗風を慕うありようを語り、また『黄檗清規』の影響を受けて『雲堂常規』や『栴樹林清規』などの制定に尽力した足跡に触れている。

中尾良信「独庵」では、江戸初期に宗門の嗣法のありようにより危機感を抱いていた長崎皓台寺の独庵玄光（一六三〇—一六九八）が道者超元（？—一六六〇）ら中国僧との関わりの中で独自の護法意識を形成して『護法集』を著すなど、宗門改革運動の先駆をなした



点を論じている。

鏡島元隆「卍山」では、月舟宗胡の法嗣で宗統復古の偉業をなして復古老人と称えられた卍山道白（一六三六—一七一五）の行実を述べた後、その功績として梅峰竺信（一六三三—一七〇七）らともになした一師印証・面授嗣法の宗門改革を挙げ、また禅戒一致に基づいて菩薩戒の儀則を復古させた点や、『黄檗清規』の影響を受けつつ、清規の古規復古を図ったことなどに触れている。

志部憲一「天桂」では、「天桂外道」と称されて異端視された天桂伝尊（一六四八—一七三五）の伝記を追い、『正法眼蔵弁註』などの著作を整理しており、その思想が待悟禅ではなく迷悟をとともに無自性・空とする修証一等にあり、打坐の形骸化を強く批判したとし、天桂門下がその立場を如何に継承したかについても触れている。

佐々木章格「指月」では、観古老人として天桂や面山と並び称せられた指月慧印（一六八九—一七六四）の行実を諸資料により解明し、各種「不能語」などの注解や仮名法語の著作について概観し、道元・瑩山からさらに遡って中国の洞山・曹山の宗旨を理想としたありようを語っている。

鈴木格禅「面山」では、損翁宗益（一六四九—一七〇五）の法を嗣いで「ただ永祖の面を見て他の面を見ず」として道元禅の宣揚に努め、若狭（福井県）の永福庵などで多くの著述を残した面山瑞方（一六八三—一七六九）の足跡を追い、その広範な学識と平易かつ綿密な宗風を伝えている。とくに清規では反檠的な古規復興を目指した点が強調され、今日につづく面山宗学の影響が如何に諸方面に大きいかが述べられている。

伊藤秀憲「瞎道」では、指月慧印の法嗣である瞎道本光（一七一〇—一七七三）の活動と著作に触れた後、その大著『正法眼蔵却退一字参』（『正法眼蔵参註』と略称）について撰述の過程や、形式・特色などを考察している。

角田泰隆「万切」では、曹洞宗振興の祖で卍山や面山と並び称せられる万切道坦（一六九八—一七七五）の行実を編年体で示し、著述に解題を示した後、『正法眼蔵秘抄』『正法眼蔵傍訓』について論じ、さらにその禅戒一如思想についても触れている。

守屋茂「老卵」では、宇治興聖寺に住した天桂派下の父幼老卵（一七二四—一八〇五）の生涯と著作を概観し、その大著『正法眼蔵那一宝』について触れ、また『正法眼蔵』に勅序を請うたが、住職罷免の浮き身にあった事件についても論じている。

関口道潤「玄透」では、永平寺第五〇世として伽藍を復興し、その中興と称えられた玄透即中（一七二九—一八〇七）の行実を追っており、宗祖道元に帰ることを主張し、面山の立場を継承して反檠的な祖規復古に尽力し、『永平小清規』を編集して曹洞一宗の修行の基準とした意味を探っている。

吉岡博道「玄楼」では、厳冷な家風から世に「狼玄楼」と称せられた天桂派下の玄楼奥竜（一七二〇—一八一三）の足跡を述べており、さらに『鉄笛倒吹』などの著述を通してその公案禅的な思考を探り、また『蓮蔵海五分録』などから詩偈に長じた詩僧としてのありようにも触れている。

吉川彰準「良寛」では、江戸時代を通じて最大の詩僧・歌人として生きた大愚良寛（一七五八—一八三一）の生涯を追い、とくに玉島円通寺の大忍国仙（一七二三—一七九一）との契合を重視し、ま

た越後に帰郷して後の国上山五合庵での和歌・漢詩の世界や晩年の貞心尼（一七九八—一八七二）との関わりを語り、さらに道元の宗風を慕う仏者としての立場にも言及している。

川口高風「風外」では、玄楼奥竜の法を嗣いだ「蛸風外」こと風外本高（一七七九—一八四七）の生涯を略述し、『烏鶺楼高閑録』『碧巖録耳林鈔』などの著作について触れた後、その画僧・能筆家としての評価や、次代の明治期を担った宗門人を育成した功績を挙げている。

熊谷忠興「物外」では、拳骨和尚と称され、剣道や柔術にも長じた物外不遷（一七九四—一八六五）の生涯を追い、幕末の国事に奔走したすがたを伝えている。また同じく幕末の国難の最中に活躍した曹洞禅僧らについても触れている。

このように江戸時代の曹洞禅僧には種々のタイプが存したのであり、卍山・面山や玄透のごときは宗門の体制の中に在って道元禅への復古を目指して江戸宗学の維持発展に貢献した人であり、また天桂や玄楼のごときは逆に学問化・形骸化した曹洞禅を実践面からとらえ直そうとした人であり、さらに桃水や良寛のごときはそうした体制にすら互することなく闊達に漂泊自由の生涯を貫かんとした天然の禅僧であったといえよう。

しかも、ここに取り挙げた人々は立場こそ違い、封建体制という限られた時代・社会の中で、それぞれに己の信ずるところに従って道元禅を活かさんとしたすぐれた消息であったことに変わりはない。

以上、述べたごとく『道元思想のあゆみ』全三冊は、道元とその

門流が鎌倉時代から江戸時代末期までおよそ六五〇年間にわたってなした貴重な事跡の集大成であり、今後の道元禅および曹洞宗思想史の研究に大きく貢献する試金石でもあろう。これまで曹洞宗の研究というと、とかく道元・瑩山のみの研究に片寄りがちであった。確かに道元が日本思想史上さらには人類の知的遺産の上に果たした功績には図り知れないものがあり、今日、道元の『正法眼蔵』などの著述に寄せる関心は世界的なものとなっている。しかし、その道元の生きざまに共感し、その教えを連綿と継承維持して生きた多くの人々の弛まぬ努力の歴史もまた重要なのであって、そこにこそ曹洞禅僧たちの輝かしい宗旨相承の意義を認めなければならぬ。

ただ、今回の企画・編集は昭和六〇年に始まっているから、宗成発刊までの期間がきわめて長かったのが惜しまれる。なぜなら、この間に道元の仏法についての関心が高まり、本覚思想への批判、真字『正法眼蔵』や十二卷本『正法眼蔵』の思想的な位置づけなどがなされ、さらに中国・日本仏教や禅宗そのものへの批判も現われるなど、諸般の課題がクローズアップしてきており、執筆依頼の段階ではそれほど意識されていなかった新たな問題を十分には盛り込めなかつた点も見られるからである。

また、道元禅の母体でもある中国の禅宗や曹洞宗について触れる個所が、わずかの論考を除いてほとんど見られない点も残念といえよう。これは日本の曹洞宗があくまで道元・瑩山を両祖に仰ぎ、禅の日本的展開を強調しているためであって、それなりに評価すべきことではあるが、とくに南北朝時代以降、江戸時代に及ぶ宗門の五位研究や、道元の入宋参学の過程などを踏まえるならば、洞山良价（八〇七—八六九）や曹山本寂（八四〇—九〇一）から宏智正覚

(一〇九一—一五七)や如浄らに至る中国曹洞宗の消息などについても一通り触れて欲しかったような気がする。

さらに付け加えるなら、禅僧の各伝については、執筆者の意図を反映してそれぞれ独自の視点から論考がなされているわけであるが、いまま少し統一的な面もあってよかったのではなからうか。各執筆者によってあまりにテーマや表現の仕方が相違していると感ずるのは私ひとりであらうか。

まして、今日、かつての曹洞宗教団が抱えてきた差別的体質がしだいに露となってきた。その遠源はすでに中世の曹洞宗教団の発展過程の中にも窺うことができるものであるが、とりわけ江戸幕藩体制に移行した後、近世曹洞宗教団において差別戒名・差別墓石・差別切紙から女性差別的発想に至るまで、諸方面で体質的に堅持されてきたのも事実である。こうした面が道元禅そのものに関わる内容ではないにしても、曹洞宗教団が現実面でたどってきたマイナス・イメージのありようについて、あるいは特別に一章を立てて具体的に触れてもよかつたのではなからうか。本書の企画に人権面での配慮がいま少し必要であったのかも知れない。

いま一つ欲をいえば、明治以降の変遷についても一編をまとめてもよかつたのではないか。明治という西欧化の風潮の中で曹洞宗門が如何に体質的な脱皮を図ったのか。眼蔵家・宗学者らは如何に道元禅を新しい時代の中で活かそうとしたのか。大正期以降、現代に至る『正法眼蔵』に対する一般思想界の関心の高まりは、如何に宗内の宗学に影響を与えたのか。また今日、道元禅への関心は世界的なものになっているが、欧米への海外布教や道元禅理解は如何にしてなされたのか。多くの興味深いテーマといえる。

もっとも、こうした面とは別に曹洞宗門が軍国化する戦前政治に翼賛して進んで戦争に荷担し、時勢に迎合してきた体質も忘れてはいけないものである。また寺院の世襲制や僧侶の肉食妻帯などが一般化していく中で、如何なる宗学が模索されて来たかなども重要な課題であらう。

このように明治以降、現代に及ぶ宗門の道元禅宣揚の歴史も、きわめて劇的な道元思想のあゆみであったわけで、『道元思想のあゆみ4(明治・大正・昭和Ⅴ)』のごときものもまとめられてしかるべきであったかも知れない。

こうした新たな課題については、今後も検討・論議が繰り返されていくものと思われるが、道元禅および曹洞宗教学史を理解する上で一つの業績として、やはり今回の『道元思想のあゆみ』三冊の編書は大きな足跡を示し得たものと信ずる。定価がかなり高く付いてしまったことは残念であるが、是非とも宗門内外の多くの方々に閲読していただきたい内容豊富な書籍である。

末筆ながら、終了退所した元所員の一人として、今後とも宗学研究所のさらなる研鑽と新たな成果を切に希望する次第である。

(吉川弘文館、平成五年七月一日発行、A5版全三冊セット、本文四七八頁・五二二頁・五七八頁、三五〇〇円)